

## 説文解字篆韻譜-説文解字繫傳 小篆対照表

広島大学総合科学研究科 鈴木俊哉

本資料は、『説文解字篆韻譜』の 10 巻本(馮桂芬翻刻本)、5 巻本(種善堂本・徐之昌旧蔵、四部叢刊影印)と、『説文解字繫傳』(いわゆる小徐本)の述古堂本・祁寯藻本、宋本『説文解字』(いわゆる大徐本)の岩崎本の見出し字の対照表である。「東洋学へのコンピュータ利用」第 29 回研究セミナーでの発表資料に対し、部分的な画像差し替えと若干の加筆を加えたものである。

### 1. 公開の主旨

徐鍇が編んだ『篆韻譜』の 2 種の版本、すなわち、10 巻本と呼ばれる景宋写本を翻刻した馮桂芬翻刻本と、5 巻本と呼ばれる元代の種善堂本およびその派生と見られる明刻本群について、工藤早恵氏による詳細な比較が行われている<sup>1</sup>([4]-[10])。工藤氏の調査により、5 巻本は大徐本から持ち込まれたと思われる要素が多い一方、10 巻本にはそれらが見えず、10 巻本は徐鍇が編んだ状態をより多く残していると推定されている。

工藤氏の結論に基づいて、糸原敏章氏は『篆韻譜』両種と現行の『繫傳』また大徐本における部首字の字形の比較を行い、現行の『繫傳』の小篆は大徐本に近づけられており、『繫傳』の元来の字形は『篆韻譜』10 巻本に見えるものに近かったという可能性を指摘した<sup>2</sup>[11]。

しかしながら、管見の限り、糸原氏以降に『篆韻譜』の字形を大徐本・小徐本と比較する研究の展開はあまり見当たらない。字形差の判断基準は研究者によって大きく異なる状況があり<sup>3</sup>[13]、様々な研究者の部分的な調査が進んだとしても、それらの結論を単純に束ねることには若干の危険がある。韻書と説文では排列や字音数、文字集合が大きく異なるため既

---

<sup>1</sup> 工藤氏の動機は、当初は小川環樹の唱えた「10 巻本が大徐本の新修字を含むことから、10 巻本は既に大徐本の影響を受けており、5 巻本はもっと後に廣韻で増補されたものである」という説[2][3]の検証であったと思われるが、最終的にはこの説に反する状況の方が多いという結果となった。

<sup>2</sup> この考え方は、『繫傳』と『篆韻譜』の原本は同じ小篆を書くという仮定に基づいている。これは少なくとも日本においては伝統的な仮定である。ただし、近年になって、文字学の研究書と単なる篆書字形表では利用者層が異なるため、異なる字形を書いた可能性もあるのではないかという指摘も出ている[12]。

<sup>3</sup> 過去の小徐本研究での字形差の判断基準は大きくばらついていることに関しては、拙稿[13]で報告している。

存の切韻系字書のデータベースと説文データベースの連携が単純にはできないこと<sup>4</sup>、また、仮に連携したとしても切韻系字書のデータベースには『篆韻譜』の字形は含まれない為、字形にどのような違いがあるかを検証可能な形で議論する基盤が現時点では見当たらないことを踏まえ<sup>5</sup>、検索性を担保したデジタルデータとして対照表を公開する。

## 2. 表の構造について

表のセルは左から順に以下のようにになっている。

### ① #: 通し番号

対照表の通し番号を 5 桁の数字で示す。後述するが、この番号は、「特定の版本に注目しない粒度での識別子」とはならず、あくまでも対照表の各版での行数に過ぎないことに注意されたい。今後の改版に伴い、行の順序の入れ替えや、1 行であったものが 2 行以上に分割されること、あるいはその逆が有りうる。見出し字の一意の識別子としては版本依存の③または④を利用されたい。

### ② zypx 王筠『説文韻譜校』における指摘種別

王筠『説文韻譜校』にて、羨文、衍文、重文、掙文、錯見、攷異のいずれかの種別で指摘されている文字である場合、種別を示した。羨文と衍文は実際には同義と思われるが [19]、文献での種別表記に倣っている。

### ③ V10 yun 10 巻本での韻目と掲出順序

韻目に対して全体の通し番号を振り、さらに同一韻目内での掲出通し番号を振った。また、各巻での韻目通し番号および韻目字<sup>6</sup>も示す。例えば、下平声巻の下巻<sup>7</sup>の 1 番目で掲出する韻目「陽」は、全体の通し番号では 040、各巻での韻目通し番号は「下平下 01」と示す。「亡」は、陽韻の中で 109 番目に掲出されるので、韻目を基準にした通し番号

<sup>4</sup> 当初、川幡太一氏による廣韻データベース[14]と段注本説文解字データベース[15]の連携によって篆韻譜のデータベースの骨格を作ることを検討したが、廣韻の挙げる字音が説文の字音よりもかなり多く、また小韻の順序も篆韻譜と廣韻ではかなり異なるため、十分な効率化とはならなかった。現在では鈴木慎吾氏の切韻データベース[16]が公開されているため、廣韻のみという状態からは改善しているが、小韻の順序問題などは自動的に解決できない。

<sup>5</sup> 本稿よりずっと早く、工藤氏は 10 巻本と 5 巻本の見出し字についての全面的な比較を行っていた筈だが、現時点では公刊した資料とは成っていない模様である。また、字形でなく収録字の対応関係だけであれば、王勝昌[17]、上田正[18]などが先んじて全面的な整理をしている。

<sup>6</sup> 切韻系の韻書の多くでは、各巻の冒頭で当該巻に含まれる韻目について「東一」「冬二」…あるいは「東部一」「冬部二」…のように列挙される。この番号を「各巻の韻目通し番号」と呼んだ。

<sup>7</sup> 切韻系の漢語音は声調を一般に平・上・去・入の 4 つに分類するが、韻書が増補されるに従い平声の収字数が他の声調に比べて増えたため、平声を 2 分割して上平声、下平声と分割するようになった。「上平」「下平」という異なる声調があるわけではないことに注意されたい。『篆韻譜』10 巻本ではさらにこれらを 2 分割するため、上平声の上巻・下巻のような区分となっている。

では「040.107」となる。

④ V05 yun 5 巻本での韻目と掲出順序

10 巻本と同様にしているが、10 巻本と異なり「下平上」「下平下」のような細分はない。例えば、「陽」韻は 5 巻本では全体の通し番号では 38 番目、また、下平声巻の中では 11 番目に掲出されるので、各巻での韻目通し番号は「下平 11」となる。先に例とした「亡」は、5 巻本においては陽韻の 111 番目で掲出されるので、韻目を基準にした通し番号では「038.111」となる。

⑤ V10 glyph 10 巻本での小篆掲出字

国会図書館所蔵の 10 巻本のマイクロフィルム紙焼きより切り出した小篆字形である。フィルムの傷に由来する細い横線が入っていることがあるので、注意されたい。字形の下には、{巻号}・{葉数/左右(=LR)}・{頁内の通し番号}によって掲出箇所を示した。

⑥ SGT glyph 『説文解字繫傳』述古堂本での小篆掲出字

四部叢刊に含まれる述古堂本の影印から切り出した小篆字形である。字形の下には、{巻号}・{葉数/左右(=LR)}・{頁内の通し番号}の形式で掲出箇所を示した。

⑦ QJZ glyph 『説文解字繫傳』祁寯藻本での小篆掲出字

華文書局影印の祁寯藻本の影印から切り出した小篆字形である。字形の下には、{巻号}・{葉数/左右(=LR)}・{頁内の通し番号}によって掲出箇所を示した。

⑧ lwsk glyph 『説文解字』(大徐本)での小篆掲出字

續古逸叢書(江蘇広陵古籍刻印社による縮印本)に含まれる宋本説文解字から切り出した、見出し小篆字形。{巻号/上下(=AB)}・{葉数/左右(=LR)}・{頁内の通し番号}の形式によって掲出箇所を示した。

⑨ V05 glyph 5 巻本での掲出字

四部叢刊に含まれる徐之昌旧蔵本の影印から切り出した小篆字形である。

⑩ CJKU

小篆に対応する CJK 統合漢字群。あくまでも検索のための指標であり、小篆とは部品が大幅に異なる常用漢字も含めている(たとえば「楽」「学」など)。今後追加される可能性があるため、一意的な識別子とはならないことに注意されたい。大徐本において新修字であるものは「(修)」、新附字であるものは「(附)」を加えている。この漢字データに関しては鈴木慎吾氏による上田正[18]由来のデータも含んでいる。

### 3. 対応付けの判断基準と掲出順序について

本比較表での対応付けと排列順序は以下のような考え方で判定している。

- ある版本の中での文字の同一性は、対応付けた現代漢字を指標として判定した。特に5巻本においては、掲出箇所によって書風が異なる例<sup>8</sup>や、異構関係になっている例<sup>9</sup>が見られるが、目立った部品の増減があるものや、説解が字音以外で明らかに違うものでない限り、字形のみによる区別は行わない。
- 当該字が全体の中で複数回掲出されている文字(複数の音価を持つ文字)の場合、

小韻の違い < 韻目の違い < 声調の違い

と考え、より違いの小さいものを対応づける。

- 当該字が全体の中で1回だけ掲出されている文字であり、『篆韻譜』における字形または説解のどちらかが対応づく場合は対応すると判定する。
  - 字形が違ってても対応すると判断した例としては、00035「蝨」、02051「覓,魂」、09450「筭,蓊,副」などがある。
  - 大徐本・小徐本では別字とされるものを『篆韻譜』の説解を根拠に対応づけた例としては、たとえば06807「凍,凍」がある。この2字は、大徐本では「凍、欠也。从欠東聲。多貢切。」「凍、水出發鳩山。入於河。从水東聲。徳紅切。」としており、説文体系の中では全く別字である。しかし、『篆韻譜』は10巻本・5巻本とも音注「多貢反」のみ示していることから、5巻本が「凍」につくるのは小篆の誤写である可能性が高い。これに関しては上田[18]も同様に対応づけている(ただし解説は加えられていない)。
- 掲出順序は10巻本の掲出位置を優先した。5巻本にのみ見える文字については、前後の10巻本に対応づく文字の間に挿入されるように排した(この区間に10巻本にしかない文字がある場合、そちらを先に掲出する)。ただし、その際に小韻が互い違いにならないように、といった工夫はしていない。
- 大徐本・小徐本の中では、字形・説解がほぼ同じで異なる部首で2回掲出される、重出と疑われる文字がいくつかある<sup>10</sup>。『篆韻譜』は字音で排列するためにこれらをまとめたと思われ、字音の数よりも多く掲出することはしていない。この場合、大徐本・小徐本が掲出する字形のうちどれが『篆韻譜』の示す字形とよく対応するかの判断は難しいため、『篆韻譜』掲出字1字に対し、小徐本・大徐本の掲出字は字形差の有無にかかわらず2字を掲出することとした。たとえば01308「無,霖」<sup>11</sup>、04146の「歛」など

<sup>8</sup> 「賡」の03571と09521での字形を比較されたい。

<sup>9</sup> 「覽」の00657と00915での字形を比較されたい。

<sup>10</sup> たとえば「右」は又部と口部で掲出され、説解には重出を疑う語が加えられている。

<sup>11</sup> 『篆韻譜』10巻本・5巻本とも、「亡」を部品として含む「霖」の小篆は見えない。

である。

#### 4. 表の着色について

本表でのいくつかの行は着色されているが、以下のような塗り分けである。

##### ① オレンジ色

10 巻本にあるが 5 巻本に対応字が全く見えない場合、たとえば 00039 の「汝」など。多くは大徐本に含まれており、『韻譜校』が掇文(5 巻本に含まれるべきなのに含まれていない文字)として指摘する。

##### ② オリーブ色

5 巻本にあるが 10 巻本に対応字が全く見えない場合、たとえば 00003 の「菓」など。10 巻本にも、大徐本にも見えない場合には『韻譜校』が羨文(説文以外のところから持ち込まれたと思われるもの)とする。ただし、別の箇所では別の字音で掲出されている場合は次項③のように扱う。

##### ③ 灰色

先行する掲出位置で既に対応づけができていた重文、あるいは、当該箇所では 10 巻本または 5 巻本のどちらか一方にしかないと対応づけが出来ないが後方の掲出位置で対応づけができていた重文。たとえば 0005 の「蝮」は上平声の中では 5 巻本にしか見えないが、去声上巻では 10 巻本でも 5 巻本でも掲出されている(06809)ので、②の「5 巻本にしか見えない字」とは扱うべきではない。そこで区別するため塗り分けている。5 巻本で複数箇所に掲出されているものの大半<sup>12</sup>は、『韻譜校』で重文として指摘されている。

##### ④ ピンク色

10 巻本と 5 巻本で異なる声調に排される場合、たとえば 00094 の「覓」など。5 巻本で重文だったものが脱落によって 10 巻本と 5 巻本の掲出箇所に共通性が無くなった可能性は完全には否定できない。多くの場合、『韻譜校』で錯見として指摘されている。

#### 5. 本資料に関する注意点

##### 5.1. 大徐本字形について

本資料では、大徐本字形は續古逸叢書所収の岩崎本の影印[20]しか示していない。これは糸原氏が調査した大徐本<sup>13</sup>のうち宋刻本であるものにあわせた結果である。岩崎本の影印と

<sup>12</sup> 『韻譜校』が参照した 5 巻本は、種善堂本に見える重文を全て言及できているわけではない[19]。王筠が用いた版本は明代の翻刻本であったことに関係すると思われる。

<sup>13</sup> 糸原氏は汲古閣本(おそらく通行本)と續古逸叢書所収の岩崎本を用いた。汲古閣本は明末清初に宋本を元に彫られたものとされてきたが(近年の白石氏らの研究の進展では、明刊本五音韻譜

して見た場合、續古逸叢書は他の清刊本に合わせるようより多くの修正が加わっている可能性があるが、四部叢刊本には大徐本原本に由来するとは考え難い崩れ方をしている字形も見えるため[21]、續古逸叢書のままとした。海源閣本の影印のように加筆が少ない宋本影印の画像で差し替えることが望ましいが、今後の課題としたい。

## 5.2. 5 卷本字形について

日本の5卷本篆韻譜の研究においては、天理図書館所蔵本が広く用いられてきたが、本資料では四部叢刊での徐之昌旧蔵本の影印を用いた。これは、徐之昌旧蔵本は元刊本だが天理本は明刊本であるという阿部隆一による推定<sup>14</sup>に従ったものだが、両者を比較すると徐之昌旧蔵本のほうが誤っている状況もしばしば見える。天理本がより古いのか補正された結果なのかは今判断を控えるが、違いが見える部分に関しては天理本の字形も示すことが望ましいであろう。今後の課題としたい。

## 謝辞

本資料の作成にあたり、科研費課題番号 16K004600 の補助を受けました。大西克也先生、高橋由利子先生、工藤早恵先生、鈴木慎吾先生、坂内千里先生に大変有益な議論と示唆を頂きました。特に漢字同定作業に関しては鈴木慎吾先生による科研費課題番号 16K02671 の成果に大きく助けられました。また、本データのデジタル公開に関しては守岡智彦先生に提案を頂いたものです。ここに御礼申し上げます。

## 参考文献

- [1] 鈴木俊哉: 『説文解字篆韻譜』と『説文解字繫傳』収字対応調査, 東洋学へのコンピュータ利用第 29 回セミナー, p.43-275, ISSN 0910-3201, 2018/03/09.
- [2] 小川環樹: 「説文篆韻譜と李舟切韻」、ビブリア天理図書館報、75 号(1980)、p.418-425
- [3] 小川環樹: 「論《説文篆韻譜》部次問題——《李舟〈切韻〉考》質疑」、語言研究、1983 年第 1 期、p.17-21
- [4] 吉田早恵: 『説文解字篆韻譜』伝本考、中国語学(234)、(1987)、p.1-10
- [5] 工藤早恵: 「十卷本『説文解字篆韻譜』について」、東京都立大学人文学報、213 号(1990)、

---

を説文の順序に並べなおしたものであり、宋本に直接拠らないことが指摘されている)、通行本は小徐本を用いて改変を加えていることが知られており、二徐の違いを見る資料としてはやや危険がある。

<sup>14</sup> 天理本と台湾中央図書館所蔵本(趙宦光・黄丕烈・羅振玉旧蔵、日本からの逆輸入とされるが明治期に一時的に日本に在ったということであろう)を比べると、天理本のほうが補写が多いにも関わらず版木が漫漶していないことから、天理本は版木を彫り直した後で刷られた明刊本ではないか、と[22]で述べている。徐之昌本については『中国訪書志』増訂版所収の「故宮博物館蔵 沈氏研易樓捐贈宋元版本志」で元刊本としている[23]。

p.49-63

- [6] 工藤早恵: 『説文解字篆韻譜』の二種類の伝本について、比較文化研究、40 号(1998)、p.51-62
- [7] 工藤早恵: 「清代中葉期における『説文解字篆韻譜』研究について」、比較文化研究、39 号(1998)、p.45-41
- [8] 工藤早恵: 「五卷本『説文解字篆韻譜』に見られる又音字について」、新島学園女子短期大学紀要、15 周年記念号(1998)、p.83-96
- [9] 工藤早恵: 「『説文韻譜校』補(1)」、新島女子短期大学紀要、16 号(1998)、p.149-157
- [10] 工藤早恵: 「『説文韻譜校』補」、『慶谷壽信教授記念中国語論集』、好文出版(2002)、ISBN 4-87220-061-6、p.121-129
- [11] 糸原敏章: 「張次立による『説文解字繫傳』の校訂について、東京大学中国語中国文学研究室紀要(12)、(2009)、p.1-24
- [12] 白石將人: 「『説文解字』文本的歴史文獻學研究」、北京大学博士論文、2017-06、p.32 と p.52 参照。
- [13] 鈴木俊哉、鈴木敦、菅谷克之: 「『説文解字』小徐本の版本比較における字形差判断基準の調査」、FIT2016 講演概要集第 4 分冊、p.15-22
- [14] 川幡太一: 「宋本廣韻データベース」、<http://kanji-database.sourceforge.net/dict/sbgj/index.html>
- [15] 川幡太一: 「説文解字注データベース」、<http://kanji-database.sourceforge.net/dict/swjz/index.html>
- [16] 鈴木慎吾: 「篇韻データベース」、<http://suzukish.s252.xrea.com/search/>
- [17] 王勝昌: 「説文篆韻譜之源流及其音系研究」、國立臺灣師範大学國文研究所碩士論文 (1974).
- [18] 上田正: 『切韻逸文の研究』、汲古書院(1984)
- [19] 鈴木俊哉: 「『説文解字篆韻譜』の重出・類形異字と王筠『説文韻譜校』」、東洋学へのコンピュータ利用第 28 回セミナー、p.367-449, ISSN 0910-3201, 2017/03/10.
- [20] 續古逸叢書 經部、江蘇広陵古籍刻印社(1994)、p.297-433、NII 書誌 ID: BN12138248
- [21] 鈴木俊哉: テンプレートマッチを用いた岩崎本説文解字影印本の加筆部分推定、東洋学へのコンピュータ応用 第 30 回セミナー 概要集 (ISSN 0910-3201), p. 231-285
- [22] 阿部隆一: 「天理圖書館藏宋金元版本考」、ビブリア 75 号、p.392.
- [23] 阿部隆一: 『中国訪書志』増訂版、汲古書院(1983)、p.709.

## 変更履歴

1.0 (2019/05/08) 初版公開

1.1 (2020/06/09) 以下の4点を修正

- 解題の脚注13を加筆し、汲古閣本の底本は宋刊説文解字ではなく、明刊本五音韻譜を再配列したものであることに言及した。

- レイアウト調整のため<sup>15</sup>、5巻本の韻目のカラムでは、韻目番号と韻目字の間に「.」を挿入している。不可視ではあるが、テキスト抽出すると「上平01東」ではなく「上平01.東」となるので、テキスト抽出あるいは検索の際には注意されたい。

- 09656(舜)の小徐本対応(SGTカラムおよびQJZカラム)が誤っていたため、修正した。

09656	158.011 入,05 賈	176.013 入05 賈						舜
09656	158.011 入,05 賈	176.013 入05 賈						舜

- 10008, 10009の大徐本・小徐本対応(SGT, QJZ, Iwskカラム)が誤っていたため、修正した(10008と10009の大徐本・小徐本対応字を入れ替え)。また、10008の現代漢字(CJKUカラム)に「速」を追加した<sup>16</sup>。

10008	164.010 入,11 末	184.009 入13 末						速,速
10009	164.011 入,11 末	184.045 入13 末						速
10008	164.010 入,11 末	184.009 入13 末						速,速,速
10009	164.011 入,11 末	184.045 入13 末						速

10008は「前頓也」、10009は「行兒也」と注されるもので、字形の類似ではなく、説解を指標として対応づけた。大徐本・小徐本の掲出順序は篆韻譜とは逆である(大徐本・小徐本は「行兒也」が先に掲出される)。また、本資料は大徐本は岩崎本字形のみ示したが、小徐本での小篆の描き分けと、五音韻譜・汲古閣本字・藤花樹本での小篆の描き分けは逆転していることに注意されたい。

<sup>15</sup> 10巻本では「上平上」のように表記しており、これと行の高さを揃えるためである。

<sup>16</sup> 「速」「速」「速」「選」の使い分けは混乱しており、本資料でも便宜上割り当てたものに過ぎない。全て収録している字書で最も古いものは北宋期の集韻だが、「速」は「前頓也」「行兒也」の2つを混ぜた説明になっており、「速」は「前頓也」とだけ説明する。「速」は「足不前也」などとされていて、直接には説文を引かないが、「前頓也」との関連が疑われる(「遂」の古字としても説明されるが、それは説文を根拠とするものではない)。「選」は「速」の或体として挙げられるもので、後に段玉裁が「前頓也」に対応する小篆字形の作字に用いた。集韻が「前頓也」のみを直接引くため「速」を10008に割り当てたが、「行兒也」のみを指す現代漢字は未だ無い状況である。